
隠人（おに）使い< 4 >

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隠人^{おに}使い<4>

【Nコード】

N4959N

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

自分の力によってますます友達を遠ざけてしまっ、土御門 綾。
藤宮 望は彼の支えになるのか？

四（前書き）

暑い日が続きますね。。。。

四

そんな日が、数日続いた。

今日も井上 遙は授業中にも関わらず、携帯のメールをチェックしていた。

『放課後の部活、楽しみにしてるよ。』

メル・アドは先輩の飯田のものであった。

(きやつ (*^^*))

遙は授業もそっこのけで携帯メールにかじりつき、(レス、レス！)

そして、送信……遙の心の中には、先輩の飯田の事しか無かった。

でも、やっぱり秘密に出来ないタイプ。だからと言って、皆の憧れの存在である飯田の事とを話した所で、反感を買うだけである。

(どうしようかな?)

頬肘を付き、考える。(誰か口の固い人だね、やっぱ。)
そこに。

藤宮 望の姿が脳裏に浮かんだ。

(そっかー。)

望なら自分が校門の所で、『誰か』を待っていた事を知っている。遙も気になってた事だが、メールの交換はしているが一度も飯田と自分が直接話しをしていない事への相談にもものつてくれるかもしれない。

(そうしよ、そうしよ！)

鞆の中から再びこっそり携帯を取り出すと、今度は望宛てにメールを送った。

「こら、井上！」

そこへ数学教師からの怒鳴り声が届いた。

「先刻から見てると、携帯をこっそりと使って！授業中だという

事を忘れたのか!？」

「す、すみません!」

遙は慌てて席を立ち、頭を下げながら、

「50Pの問題ですね。はい、答えは『B』ですっ!」

早とちりな答えを言ってしまった。

クラスの全員が、そんな遙を見つめ笑い出す。

「仕方がないな!」

彼女の成績を知っている教師は、「問題出す前に答え言われちゃ、俺の立場が無いだろうが。」

頭をかく。

「すみませんっ!」

遙は再び、頭を下げるハメとなった。

桜が葉桜となる頃。

昼休みの校門で、綾と望は遙と会っていた。

「はい?」

望は目を丸くした。「井上がずっと待ってたのは、野球部の飯田先輩だったのか?」

「そう!」

遙ははしゃいで手を胸元で合わせ、「それでね、毎日メール交換してるの。もしかしたら、両思いかなー、なんて。」

「告こられたの?」

望が尋ねる。すると、彼女は暗い表情になって、

「それがね。メールはこまめにくれるんだけど、一度も話した事ないんだ。」

「だって、同じ野球部でマネージャーじゃん。」

「そうなのよ。その事だって、飯田先輩がメールで『マネージャーになつてくれないか?』って来たから、マネージャーになったのよ……でも、実際、飯田先輩が話すのはチームの人か他のマネージャーばかり。」

「ふーん。」

望は軽く首を傾げた。「他の人のメル・アドとかそういうのは？」

「無い無い！」

遙は慌てて否定した。「だって、ちゃんと本人から聞いたメル・

アドだもん。」

「そっか………」

もうすぐ、昼休みは終わる。

望は傍らの綾に視線を移し、

「なあ、綾ならどう思う？」

「………」

綾は無表情に2人を見つめていた。

やがて、

「行つて来る。」

それだけ言い残すと踵を返した。

「ちよっ！綾！」

「土御門君！」

2人は急いで彼の後を追った。

それを見届けるかの様に、昼休みの終わりを告げるチャイムが校内に鳴り響いた。

突然の出来事だった。

ガラッ

授業が始まったばかりの、3年A組の後ろの扉が開かれた。

生徒たちは一斉に黒板からその方向に視線を移した。

そこに立っていたのは、土御門 綾だった。

「土御門。」

彼の事を知っている英語教師は、「どうした。授業はもう始まっているぞ。」

声をかけた。

綾はそれを気にした風もなく、一人の生徒の元へと歩いて行った。
飯田の元へだった。

バンッ

机の上に手を置き、

「『お前』の目的は何だ。」

冷たいよく透る声で呟く様に言った。

「土御門……」

飯田はじつと何か判らない様子で、彼の顔を見るだけだった。
生徒たちがざわめく。

「今、土御門、変な事言ったな。」

「飯田が相手だぜ。」

「何かまた土御門の奴、変な事やってるんじゃないの?」
その声にも耳を貸さず、綾は重ねて、

「お前は憑かれてる。」

そう言った。生徒たちのざわめきが一斉に高まる。

「土御門、授業中だぞ!」

教師の怒る声が聞こえて来た。その時、

「綾!」

「土御門君!」

望と遙が彼に追い付いた。

「何やってるんだ!」

望は綾の腕を引っ張り、遙は、

「ごめんなさい! 飯田先輩!」

深々と頭を下げる。

「授業を始めるぞ!」

ざわめきの中、教師はそう言い、

「3人共、早く教室へ戻れ!」

望たちにそう言った。

「何であんな事、言ったんだよ！」

その一部始終を見ていた望が言った。「君の事はただでさえ周りに勘違いされてるトコあるんだから、もっと口の利き方に気を付けなきゃ。」

「俺は事実を言ったただけだ。」

冷たい視線で、望を見つめる。

場所は再び、校門の所。

「あの飯田つて奴は『闇』と契約したんだ。」

「どういう事？」

遙が尋ねる。「土御門君が陰陽師みたいな事やってるっていうのは知ってるけど、それと飯田先輩とどういう関係があるの？」

「今の所よくは判らないが」

綾は答え、「俺の周りの誰かがナイト・メアに憑かれている。」

「ナイト・メア？」

遙が首を傾げる。「何、それ。」

「夢の中でその人と契約すると、その人の願いが叶うんだ。」

代わりに望が答えた。「俺もこの間、綾に助けもらったトコ口。」

「夢の中？契約？」

遙は目を丸くした。「それって……私かもしれない。」
ぽつりと呟く。

「何だって!？」

彼女の台詞に望は驚き、「何か変な夢でも見たの？」

「うん。」

遙は頷き、「1週間位前かな？女の人が出て来て、何かの契約をする」と飯田先輩と付き合う事が出来るって言うから……」

そこで一呼吸置き、「単なる夢だと思って、良く判らない『約束』をその人としたの。それからだよ、飯田先輩からメールがよく来る

ようになったの。」

「・・・・・・・・」

綾は無表情で、彼女の顔を見つめていた。

遙は、

「だから、土御門君。もし、それが本当なら『憑かれている』のは私の方で飯田先輩は関係ないよ！」

「それもそうだけど」

望は軽い溜息を付き、「ああいう言い方って間違ってるよ、綾。綾の事を本当に知ってるのは少しの人しかいない。その少しの人にも君はあんな言い方しかしないんだから――それじゃ、遠巻きに君を見ている人も、もっと君の事を恐れて遠巻きになるよ。」

「・・・・・・・・」

「皆、君を嫌ったりなんかしてないよ。だけど、綾が自分から皆を遠ざけているんだ。気付かない？」

「・・・・・・・・」

綾は目を細めた。

「私だって」

遙が続ける。「土御門君のやってる事良くは知らないけど、遠巻き組にはなりたくない。だって、土御門君、本当は優しいんでしょ？」

「何でそんな事決めつける。」

遙の言葉に綾が答える。

「去年だって」

遙はじつと綾の顔を見つめ、「『ごっくりさん』やってたクラス・メイト、怒ったじゃない。」

「・・・・・・・・」

「そうだよ、綾。」

望がにっこりと笑い、「そりゃ、綾の家は大変かも知れないけど、偶然でも何でも俺たち出逢ったじゃん。去年の春からずっと。」

脳裏に甦る、高校入学合格者発表の日。

降り注ぐ桜がやけに綺麗だった。

「今回だって、何かおかしい所があったら、私、土御門君に相談しようと思ってたし。」

そう言う遙。

綾は静かに、2人を見つめ、そして、

「お前たちは早く教室へ帰れ。」

それだけ行つて、校門を通り、学校の外に向かった。

「待てよ、綾！」

その右腕を望が掴む。「一緒に授業に出ようよ。」

「……………」

綾は静かにその手を振りほどいた。「俺には授業以上に、今は『隠人使い』としての仕事がある。」

「……………」

振りほどかれた自分の腕を、望はじつと見つめるだけだった。

「土御門君。」

遙の声は春風によつて、宙にかき消えた。

その夜。

綾は夢を見た。幼い頃の夢である。清明神社の宮司を務める父の元で育っていた。

家の事を余り理解出来ない綾の同級生たちは、

「お前の家には鬼がいるんだってな。」

「キツネに憑かれてるんだよな。」

クラス・メイトたちは皆そんな風に綾の事を見ていた。

綾は学校から帰り、両親、祖父母への挨拶を終えると、一人、裏庭へ向かった。

木の棒を使つて、五芒星を茶色い地面に描く。

「小鬼、小鬼。」

そう呟く。すると何処からか無数の光が日中にも関わらず現れた。綾は言う。

「遊ぼう、小鬼。」

それは彼の『当たり前』の遊び。まだ、小さ過ぎて、家の事など訳が判らなかつた。

「綾。」

ある日、祖母が『それ』に気付いた。

「やめなさい、そんな遊び。余計友達を作れなくなるよ。」

「……」

綾は無言で俯いた。ややあつて、

「いいんだ、別に。」

子供の表情ではなかつた。安倍晴明の血を氏の誰よりも濃く受け継いでしまった綾の運命。「誰も巻き込みたくない。」

一言、呟く……

綾はベッドから飛び起きた。「ヤバ。眠る所だつた。」

右手で髪をかき上げる。

ナイト・メアの現世への降臨から、綾はほとんど寝ていない。

もし、自分が寝てしまって、その力をナイト・メアに利用されたら……

そんな思いが彼にはあつた。

やがて、机の上の白い紙を取り、綾は五芒星をかき始めた。

書き終えたものから次々と窓から外に放つ。

「隠人よ。ナイト・メアの居所を探せ。それは恐らく俺の近くに
いる者。」

冷たく、そう言う。

『皆、君を嫌つたりなんかしてないよ。だけど、綾が自分から皆を遠ざけているんだ。気付かない？』

もうすぐ授業も終わる頃だろう。

そんな中、あの時の望の台詞だけが綾の心の中に響いていた。

四（後書き）

ラストをご想像出来る方いますかー???

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4959n/>

隠人（おに）使い < 4 >

2010年10月8日23時35分発行